

機関番号：21501

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19592518

研究課題名 (和文) 妊娠期からの虐待予防に向けた早期介入プログラムの開発

研究課題名 (英文) Development of Nursing intervention for Child abuse Prevention from Prenatal period

研究代表者

大平 光子 (OHIRA MITSUKO)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授

研究者番号：90249607

研究成果の概要 (和文)：

本研究は妊娠期からの子ども虐待予防に向けた早期介入プログラムの開発を目的とした。産褥期の養育態度を予測する質問紙調査を行い、その後の妊婦健康診査において3～4回の介入プログラムを実施した。介入プログラムの目標は「妊婦自身が自分の持つ力に気づきながら親準備性を高める」であり、そのコアは「対象者が持つ長所および強みを強化する」、「対象者が自己肯定感を得る」、「自分自身の持つ能力に自分自身で気づく」の3点であった。介入プログラムの効果は産後の質問紙調査および介入に対する対象者の反応を分析した。ただし、本研究に参加協力を得ることができた対象者は産褥期にネガティブな養育態度や育児困難が予測される対象ではなかった。質問紙調査における両群の有意な差は認められなかった。介入実施群の反応を分析した結果、本研究で実施した介入プログラムは親準備性を高めるだけでなく、自分の強みに気づき、これからの育児をやっていけるという感覚を持つこと支援する可能性が示唆された。本介入プログラムは自分の強みに気づきながら親として発達していくことを支援する、子育て支援プログラムとしても活用可能であると考えられる。本介入プログラムの養育態度や育児困難のハイリスク群に対する効果については、今後研究を継続して明らかにしていく必要がある。

研究成果の概要 (英文)：

The purpose of this study were development of nursing intervention for child abuse prevention from prenatal period. Conducted a questionnaire survey to predict the attitude toward child-rearing around 32 weeks of gestation. After that, the nursing interventions for pregnant women in three or four times. The goal of the intervention program is "aware of their own power of a pregnant woman prepares to increase parents' were. The core of intervention program were the following three points. "to enhance the advantages and strengths of themselves", "pregnant women acquire a sense of their own self-affirmation" and "pregnant women are aware of their own abilities."

The effect of the intervention program were analyzed by the postpartum questionnaire and the verbal reactions. Participants in this study, the population was less likely to show negative rearing attitudes and parenting difficulties postpartum period. There were no statistically significance differences between the intervention group and control group. This intervention program is to increase parent preparation. In addition, through their awareness of their strengths suggested that be able to acquire a sense of the future go to do the parenting. This intervention program that helps parents continue to develop as yet aware of her strengths, is considered as a program can use. Effectiveness

of programs for high-risk group rearing attitudes and parenting difficulties, it is necessary to reveal the future to continue the research.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学（母性・女性看護学）

キーワード：子ども虐待予防，妊娠期，早期介入，親準備性，自己肯定感

#### 1. 研究開始当初の背景

わが国における子ども虐待予防においても、ようやく、妊娠期からの予防という視点が重視されるようになってきた。しかしながら、いまだ、具体的な支援方法は模索中である（福田2005，神原2006，花田2005）。われわれは、助産師，保健師という妊娠期から，妊婦とその家族に関わることができ，その変化をいち早く捉えることができる立場にある。妊娠期は子ども虐待や親の成育歴，夫や家族との関係が第3者に見えやすくなる時期であることが明らかになっている。また，われわれは子ども虐待予防に向けた臨床判断プロセスに基づく看護援助モデルを明らかにする過程で，他者（特に親）との関係性におけるリスクと自己肯定感の低さからくると考えられる視線や行動のぎこちなさは，ベテラン看護職者が最初にもつ気がかりであることを明らかにしてきた。さらに，看護援助の視点として，受容的な態度やエンパワメントを高める援助によって，看護職者と対象者が信頼関係を築きながら，看護援助を展開することにより，子ども虐待に関する核心部分にアプローチしやすくなることもわかってきた。

以上のことから周産期の早い段階で，「幼少期に大切にされた経験」，「自己肯定感」，「日常的なストレス状況」を捉えることによって，虐待ハイリスクケースをスクリーニングすることは早期介入に有用であると考えられる。さらに，妊娠期から産褥早期にかけて，エンパワメントおよびレジリエンス（その人

がこれまでの経験を通して身に着けている能力で，困難な状況にあってもその状況に適応していける強靱性）を高める看護援助を行うことは，親になる両親にとって，特に母親にとって有益なことであると考えられる。

これらの先駆的な取り組みの1つとして，アメリカオレゴン州における，親のエンパワメントに焦点をあてた親子の愛着の絆をつくるための家庭訪問事業の成果が注目されている。わが国においても，家庭訪問の重要性は十分に認識され，モデル的な取り組みが始められている。しかしながら，現状では，家庭訪問は産後の訪問が主流であり，妊娠期からの家庭訪問は現実的には困難である。

虐待や暴力の問題に関わる看護援助の原則として，国内外でエンパワメントおよびレジリエンスの概念が用いられるようになってきている。看護援助方法の概念としては重要視され始めているが，看護援助における効果は，十分に明らかにされておらず，縦断的研究においてその効果を示すことができれば意義深いと考える。

この前向き研究により，エンパワメントとレジリエンスを高める看護援助方法の効果を明らかにすることができれば，親準備性を促進するとともに，周産期，特に妊娠期からの虐待予防という虐待の一次予防に貢献する予防的介入の看護援助モデルの一つとなる。また，本研究は前向き研究であり，妊娠期からの虐待予防の視点に立った看護援助方法の開発を目指すため，看護援助方法の開発と妊娠期からの虐待予防の両方を同時に進めていくことができる。さらに，臨床に即した看

護援助の効果を評価しようとする研究であり、日常的に臨床で活用可能な看護援助方法を見出すことが期待できると考える。

## 2. 研究の目的

本研究課題の最終的な目的は、妊娠期から子ども虐待予防に向けた早期介入プログラムを開発することである。

「親になるプロセス」において、エンパワメントおよびレジリエンスを高める看護援助を実施し、その効果の評価を通して、エンパワメントおよびレジリエンスを高める早期介入プログラムが妊娠期からの虐待予防に有用であることを明らかにする。

第1段階として、妊娠期から子どもとのかかわり方の特徴（子育て困難感）を予測するためのスクリーニング尺度を作成する。本研究では妊産婦の特性を捉える尺度と養育態度を捉える尺度との相関の分析により、妊娠期から子どもへのかかわり方の特徴を予測する尺度を作成することを目的とする。第2段階では虐待ハイリスクケースに対する早期介入プログラムを創出する。

第3段階で妊娠期にスクリーニングした虐待ハイリスクケースに早期介入プログラムを行いその介入効果を評価する。

## 3. 研究の方法

### 1) 第1段階

妊娠期に産褥期の養育態度を予測する質問紙の検討

#### (1) 研究対象者

産褥1ヶ月の褥婦（初産婦，経産婦）

#### (2) 調査方法

自記式質問紙調査，郵送法

#### (2) 質問紙の構成

##### ①褥婦の特性と捉える尺度

- ・内的ワーキングモデル（IWM）
- ・児童期までのレジリエンス
- ・自己肯定感尺度
- ・日本語版

Personal Resource Questionnaire85

##### ②養育態度に関する尺度

- ・Parent Bonding instrument（PBI）
- ・育児支援質問紙（子ども総研）
- ・養育態度に関するオリジナル項目
- ・赤ちゃんへの気持ち尺度

#### (3) 分析方法

養育態度を従属変数とした重回帰分析および、養育態度の予測に関するモデルの評価は共分散構造分析を行った。

### 2) 第2段階

研究代表者および連携研究者（子ども虐待予防，親準備性，親役割獲得，若年妊婦の親役割に関する研究に精通）により，介入プログラムを創出した。

#### ①介入プログラムの概要

介入プログラムの目標は「妊婦自身が自分の持つ力に気づきながら親準備性を高める」こととした。介入プログラムのコアは、「対象者が持つ長所および強みを強化する」，「対象者が自己肯定感を得る」，「自分自身の持つ能力に自分自身で気づく」の3点である。

#### ②プログラムの実際の展開例

- ・妊娠中の生活，親役割準備について，できていること，努力していることを支持する。
- ・妊娠，出産，育児についての予測を促す。
- ・妊娠，出産，育児に関する予測に応じた目標，計画をともに立てる。
- ・目標に向けた行動を支持する。目標達成状況を支持する。

### 3) 第3段階

早期介入プログラムによる介入および効果の評価。

#### (1) 研究対象者

##### ①早期介入プログラム実施群

妊娠期（30～34週頃）と産褥1ヶ月の質問紙調と介入プログラムの実施に協力可能な初産婦，経産婦

##### (2) 早期介入プログラム非実施群

妊娠期（30～34週頃）と産褥1ヶ月の質問紙調査に協力可能な初産婦，経産婦

#### (3) 調査内容

##### ①妊娠期質問紙

- ・内的ワーキングモデル（IWM）
- ・児童期までのレジリエンス
- ・自己肯定感尺度
- ・日本語版

Personal Resource Questionnaire85

- ・Parent Bonding instrument（PBI）

##### ②産褥期質問紙

- ・育児支援質問紙（子ども総研）
- ・養育態度に関するオリジナル項目
- ・赤ちゃんへの気持ち尺度

##### ③介入プログラム

特に親準備性に焦点を当てて、「対象者が持つ長所および強みの強化」，「対象者が自己肯定感を得る」，「自分自身の持つ能力に自分自身で気づく」ことを目標として，妊娠生活上の相談，保健指導を通して，介入を実

施した。

介入プログラムは妊娠 30 週前後から妊婦健康診査のたびに実施した。プログラムの実施は通常の保健指導、妊婦相談における一部として実施した。

#### ④介入プログラムの評価

- ・介入プログラム実施内容と対象者の反応は対象者の許可を得て、ICレコーダに録音した。録音内容を逐語録とした。

逐語録から介入者および対象者の反応を抽出する。対象者が強み、自己肯定感を得ること、対象者自身が自分の持つ力に気づくことのプロセスとプロセスにおける変化を読み取る。

産褥期の養育態度および赤ちゃんへの気持ちに関する質問紙調査結果と産褥 1 ヶ月時に対象者から、本介入プログラムに参加した成果に関する主観的評価から、介入プログラムの効果を総合的に評価する。

#### 4) 倫理的配慮

研究協力施設の承諾を得るとともに、山形県立保健医療大学倫理委員会の承認を得て研究を実施した。

#### 4. 研究成果

##### 1) 産褥期の養育態度を予測する質問紙

われわれは、先に行った「子どもとのかかわり方の特徴（子育て困難感）を妊娠期に予測するためのスクリーニング尺度の作成」によって得られたデータをもとに共分散構造分析を行った結果、子どもとのかかわり方の特徴つまり育児への態度は内的ワーキングモデル、レジリエンス、自己肯定感、ソーシャルサポートが関連しあって構成された育児における要素の影響を受けることが明らかになった。育児への態度は育児困難感と赤ちゃんへの気持ちによって構成される。特に育児困難感は低い自己肯定感とレジリエンスによって影響を受けることが明らかとなった。

育児への態度と自己肯定感およびレジリエンスの関連があることは、一連の研究によって開発を試みようとしている、妊婦自身が持つ力に気づきながら親準備性を高めることを目指す看護介入の有用性を示唆するものであると考える。

##### 2) 早期介入プログラムの有用性の評価

産褥期の養育態度を予測する質問紙調査を妊娠 32 週前後に行い、その後の妊婦健康診査において 3～4 回の介入プログラムを実施した。今回の研究期間中に参加協力を得ること

ができた対象者は、産褥期にネガティブな養育態度や育児困難が予測される対象ではなかった。

質問紙調査における両群の有意な差は認められなかった。介入実施群の反応を分析した結果、本研究で実施した介入プログラムは親準備性を高めるだけでなく、自分の強みに気づき、これからの育児をやっていけるという感覚を持つこと支援する可能性が示唆された。本介入プログラムは自分の強みに気づきながら親として発達していくことを支援する、子育て支援プログラムとしても活用可能であると考えられる。本介入プログラムの養育態度や育児困難のハイリスク群に対する効果については、今後研究を継続して明らかにしていく必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

大平光子, 佐々木くみ子, 町浦美智子, 上野昌江: 母親の特性と産褥期の養育態度の特徴の関係, 日本子ども虐待防止学会第 14 回学術集会ひろしま大会 (広島市), 2008 年

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

大平 光子 (OHIRA MITAUKO)

山形県立保健医療大学・保健医療学部・教授  
研究者番号: 90249607

##### (3) 連携研究者

佐々木くみ子 (SASAKI KUMIKO)

大阪医科大学・看護学部・准教授  
研究者番号: 00284919

町浦美智子 (MACHIURA MICHIKO)

大阪府立大学・看護学部・教授  
研究者番号: 70135739

上野昌江 (UENO MASAE)

大阪府立大学・看護学部・教授  
研究者番号: 70264827